

保育者養成課程における学生の体育観構築に向けた基礎的研究 —体育（運動）に対する意識調査を通して—

Fundamental Study on Forming the Viewpoint on Physical Education
among Students of the Nursery Teacher Training Course
—From the Results of an Attitudinal Survey of Physical Education(Sport)—

柳瀬慶子
Keiko Yanase

（要約）

本研究は、保育者養成課程の学生に体育（運動）に対する意識調査を行い、「幼児体育」の授業を通して意識の変容を捉え、保育者としての体育観構築に向けた授業づくりの視座を得ることを目的とした。その結果、体育（運動）のおもしろさに触れて「共感志向による意味」を生起させることができた。そこから自己への気づき等の学びが生まれ、「原則思考（超越思考）による意味」や「有用思考による意味」も生じてくること、そのためには学習内容の明確化が必要であることが明らかとなった。

（キーワード）

体育観、体育（運動）に対する意識、「共感志向による意味」

1. はじめに

1) 問題の所在と研究の目的

幼児期の子どもの体育をめぐる課題として、社会環境や人々の生活様式の変化によって体を動かして遊ぶ機会が減少し、環境の変化が子どもの「多様な動きの獲得」や「体力・運動能力」に多大なる影響を与えていている¹と言われている。ここでの「体力・運動能力」とは、神経機能の発達が著しい幼児期の子どもが、周りの状況に合わせて「タイミングよく動いたり、力の加減をコントロールしたりする等の運動を調整する能力」を指している。単なる数値で測定可能な結果としての体力・運動能力だけではなく、他者（人・モノ等子どもを取り巻くあらゆる環境）の動きを受信し、それに伴った自己の動きを発信していく力のことである。「体力・運動能力」とは、他者とのかかわりの中で發揮される力である。

このような「体力・運動能力」を幼児期に育むためには、保育者養成課程において、保育者として必要な体育観をどのように養成していくべきだろうか。本稿では「体育観」を、「保育者として子どもの体育において大切にする考え方」と定義する。保育者養成課程に在籍する学生の「体育観」は、学生が保育者養成課程に入学するまでの被教育体験の中で、暗黙的に培われてきた体育（運動）に対する意識と密接な関連があると考えられる。つまり、学生自身と高等学校教育までの体育科学習や部活等を含む運動体験との関係性の蓄積が、体育（運動）に対する意識となって表れているのである。保育者になった時、保育者の体育（運動）に対する意識が子どもの体育に多大な影響を与えることともつながっていると思われる。

そこで本研究では、保育者養成課程の学生の体育（運動）に対する意識調査を行い、他者とかかわり

のある運動遊びを設定した「幼児体育Ⅰ」の授業を通して、学生の体育（運動）に対する意識の変容を捉え、保育者として必要な体育観構築に向けた授業づくりの視座を得ることを目的とする。

2) 保育者養成課程の学生と体育（運動）との関係性を読み解く視点

保育者養成課程に在籍する学生にとって、体育（運動）という学習は、学生自身の中でどのような意味を持ち、どのように位置づいているのであろうか。岡野²は、作田³の「自己が他者や外界との関係を結ぶ様式のタイプ」の考え方を援用しながら、「学習者による意味基準」の整理を行っている。「学習者による意味基準」とは、「学習者が学習行為において、どのような意味を感じ取り、どのような体験を中心として、他者（人・モノ・自然等）とどのようにかかわるか」という基準のことである。意味基準には次の3つがあるという。

一つ目は、「有用志向による意味」である。これは、「自分にとって役に立ったかどうかということに伴う意味」であり、「自分の持っている知識が有益であるかどうかという『有用体験』が中心」となり、「他者は『有用対象』」として位置づく。二つ目は、「原則志向（超越志向）による意味」である。これは、「前の自分より上達した、向上したということに伴う意味」であり、「前ある力から高まった力へと上昇する『拡大体験』が中心」となり、「他者は『挑戦対象』」として位置づく。三つ目は、「共感志向による意味」である。これは、「その場で他者と共感して夢中・没頭しているときの意味」であり、「自分と他者の『融合体験』が中心」となり、「他者は『融合対象』」として位置づく。

今後子どもの体育でを担っていく保育者養成課程の学生にとって、体育学習や運動体験の結果、自分自身にとってそれが役立つものであったり、以前の自分自身よりも成長が見られたりすることが望ましい。そういう点では、「有用志向による意味」や「原則志向（超越志向）による意味」が立ち上がる必要である。しかし、体育（運動）場面において、将来の健康のために行うという考え方や、自己や他者の記録と競い合って勝つことを目指すだけでは、他者との多様なかかわりを育みながら子どもの体育でを行っていく保育者になるには、不十分であると考える。保育者を目指す学生として、自分自身が体育（運動）のおもしろさに触れ、他者と共に夢中になり、他者と一体となって体育（運動）のおもしろさを探究していく「共感志向による意味」が立ち上がることが必要である。そのような意味を感じることによって、他者（人）が単なる運動メンバーでなく、共に子どもの体育でを探究していく仲間となり、保育者となった時の同僚性の発揮も期待ができると考える。そして、数値で測定可能な子どもの体力・運動能力だけを重視する保育を展開して、運動技能の習得という結果に子どもを追い込むのではなく、他者との豊かなかかわりの中で、子どもが運動遊びを行っている「今・ここ」を大切にしながら、生きる力としての「体力・運動能力」を育む保育者になっていくのではないかと考える。以上のような理由から、この3つの「学習者による意味基準」を、「体育（運動）に対する意識調査」の分類の視点として用いることとする。

2. 研究の方法

「幼児体育Ⅰ」の授業では、他者と共に創造する運動遊びの世界を設定し、毎時の学習内容に沿った実技を行った。「体育（運動）に対する意識調査」については、以下の通り実施した。

調査対象：T 短期大学の平成 26 年度前期授業「幼児体育 I」1 年受講生 A クラス 50 名に質問紙を配布し、50 枚を回収した。回答率は 100% である。

調査方法・調査内容：「学生の体育（運動）に対する意識調査」を実施した。第 1 回調査内容は、「体育（運動）に対する意識 とても好き・どちらかというと好き・どちらかというと嫌い・嫌いの中で 1 つを選択しましょう。その理由も記述しましょう。」であった。第 2 回調査内容は、「現在の体育（運動）に対する意識 とても好き・どちらかというと好き・どちらかというと嫌い・嫌いの中で 1 つを選択しましょう。その理由も記述しましょう。」であった。

調査実施時期：計 2 回の調査を行った。第 1 回調査は、平成 26 年 4 月 8 日（火）3 限目第 1 回授業後に実施した。第 2 回調査は、平成 26 年 7 月 1 日（火）3 限目第 12 回授業後に実施した。

分析方法：第 1 回調査と第 2 回調査における回答理由を、それぞれ KJ 法⁴で分析した。カテゴリー間を、関連があるものは直線、反対の意味のものは双方向矢印、順序性の見られるものは一方向矢印でつなぐこととした。

倫理的配慮：「体育（運動）に対する意識調査」を研究に活用することに関して、対象学生に許可（署名・捺印）を得た。調査を行う際には、調査内容が学習評価に反映しないことと、個人が特定されないように配慮することを説明した。

3. 「幼児体育 I」の授業概要

「幼児体育 I」の授業は、幼稚園教諭二種免許（選択科目）・保育士資格（必修科目）を取得するために位置づけられている科目である。本学では卒業必修科目となっており、1 年生前期に全員が受講している。授業テーマと授業概要、各回の学習内容は次の通りである。

授業テーマ：保育者としての体育観の構築

授業概要：子どもの体の現状や課題について把握し、保育者としてどのような子どもの体を育むことが必要か、実技を通して考察する。毎回の授業の振り返りとして、各自が「学びの履歴」を記述し、その記述を基に授業者が授業通信を発行し、他者の考えに触れて学び合う機会を設けている。

授業内容：

授業回	学習内容	授業回	学習内容
1	オリエンテーションー自分の体育観を振り返ろうー（講義）	9	受信・発信するからだ①ー運動遊びの成り立ちー（実技）
2	子どものからだをどう育むかー課題と今後の方向性ー（講義）	10	受信・発信するからだ②ー表現するということー（実技）
3	触れる・触れられるからだ①ー運動遊びの世界ー（実技）	11	受信・発信するからだ③ー表現するということー（実技）
4	触れる・触れられるからだ②ー運動遊びの世界ー（実技）	12	受信・発信するからだ④ー運動技能の立ち現われー（実技）
5	委ねる・委ねられるからだ①ー脱意志の遊びー（実技）	13	グループ実践提案③（実技）
6	委ねる・委ねられるからだ②ー脱意志の遊びー（実技）	14	グループ実践提案④（実技）
7	グループ実践提案①（実技）	15	学びの振り返り（講義）
8	グループ実践提案②（実技）		

4. 体育（運動）に対する意識調査

1) 第1回調査の結果

第1回調査では、体育（運動）が「とても好き」は20名、「どちらかというと好き」は22名、「どちらかというと嫌い」は8名、「嫌い」は0名となった。その理由を、KJ法で分析を行った。

KJ法により、50回答から115項目が抽出され、22カテゴリーに分けられた。

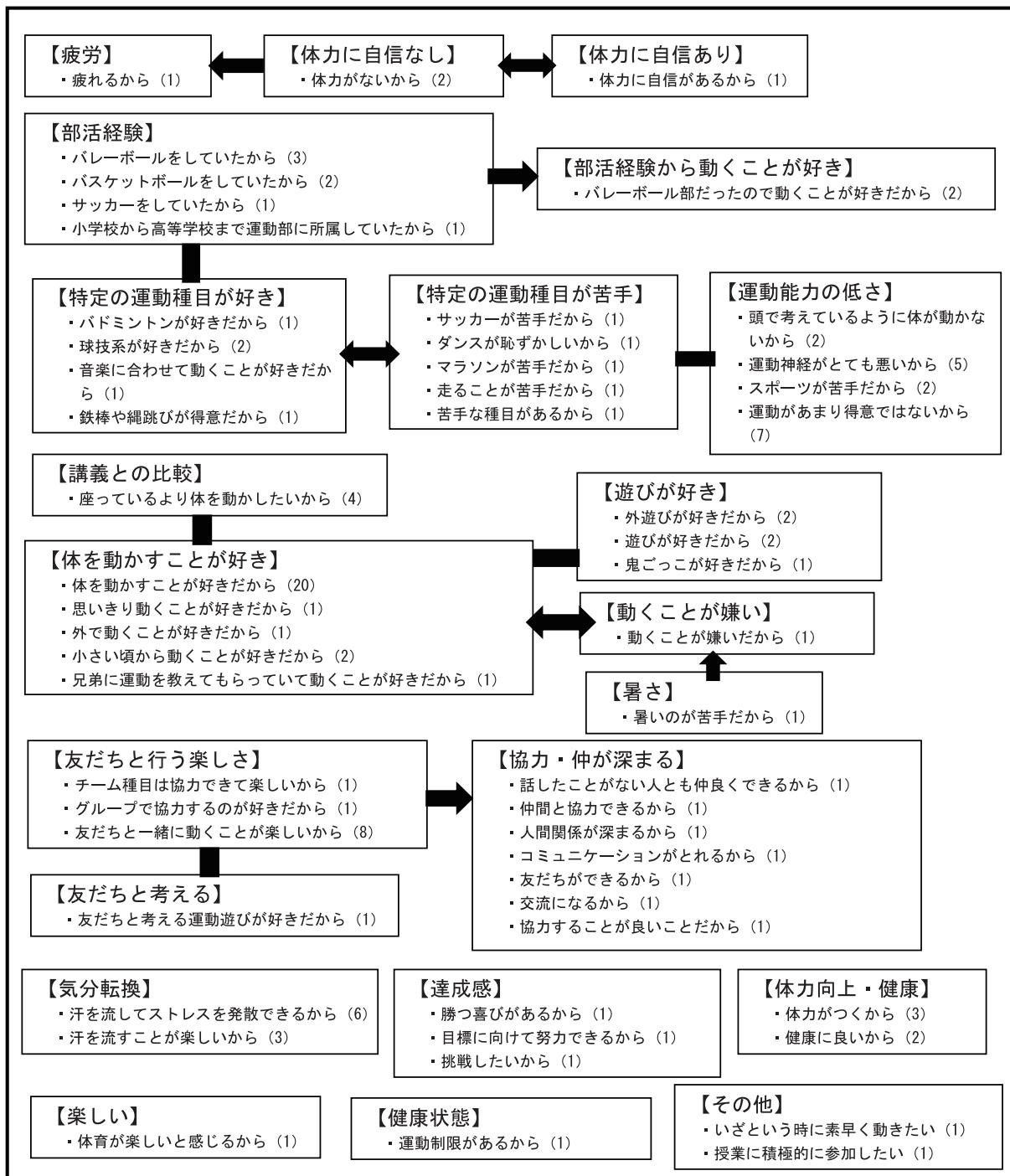


図1 第1回体育（運動）に対する意識調査

上位カテゴリーから見ると、第1に「体を動かすことが好き」(25項目)が挙げられた。思いきり動くことが好きや、小さい頃から動くことが好きだった等の記述が見られた。第2に、「運動能力の低さ」(16項目)が挙げられた。運動が得意ではないや、体がイメージ通り動かせない等の記述が見られた。第3に、「友だちと行う楽しさ」(10項目)が挙げられた。チーム種目は友だちと協力できるや、グループで協力することが好き等の記述が見られた。第4に、「気分転換」(9項目)が挙げられた。ストレス発散になる等の記述が見られた。第5に、「部活経験」(7項目)と「協力・仲が深まる」(7項目)が挙げられた。「部活経験」は、特定種目の部活動を行っていたや、小学校から運動部に入っていた等の記述が見られた。「協力・仲が深まる」は、運動をするとコミュニケーションがとれるや協力できる等の記述が見られた。第6に、「特定の運動種目が好き」(6項目)が挙げられた。バドミントンや球技系等が好きという記述が見られた。第7には、反対の「特定の運動種目が苦手」(5項目)や「遊びが好き」(5項目)、「体力向上・健康」(5項目)が挙げられた。「特定の運動種目が苦手」では、サッカーやダンスが苦手等の記述が見られた。「遊びが好き」では、外遊びや鬼ごっこが好き等の記述が見られた。「体力向上・健康」では、運動は体力がつくや健康に良いといった記述が見られた。

下位カテゴリーでは、「講義との比較」(4項目)、「達成感」(3項目)、「部活経験から動くことが好き」(2項目)、「体力に自信なし」(2項目)、反対の「体力に自信あり」(1項目)、「疲労」(1項目)、「暑さ」(1項目)、「楽しい」(1項目)、「動くことが嫌い」(1項目)、「友だちと考える」(1項目)、「健康状態」(1項目)、「その他」(2項目)が挙げられた。

2) 第1回調査結果の考察

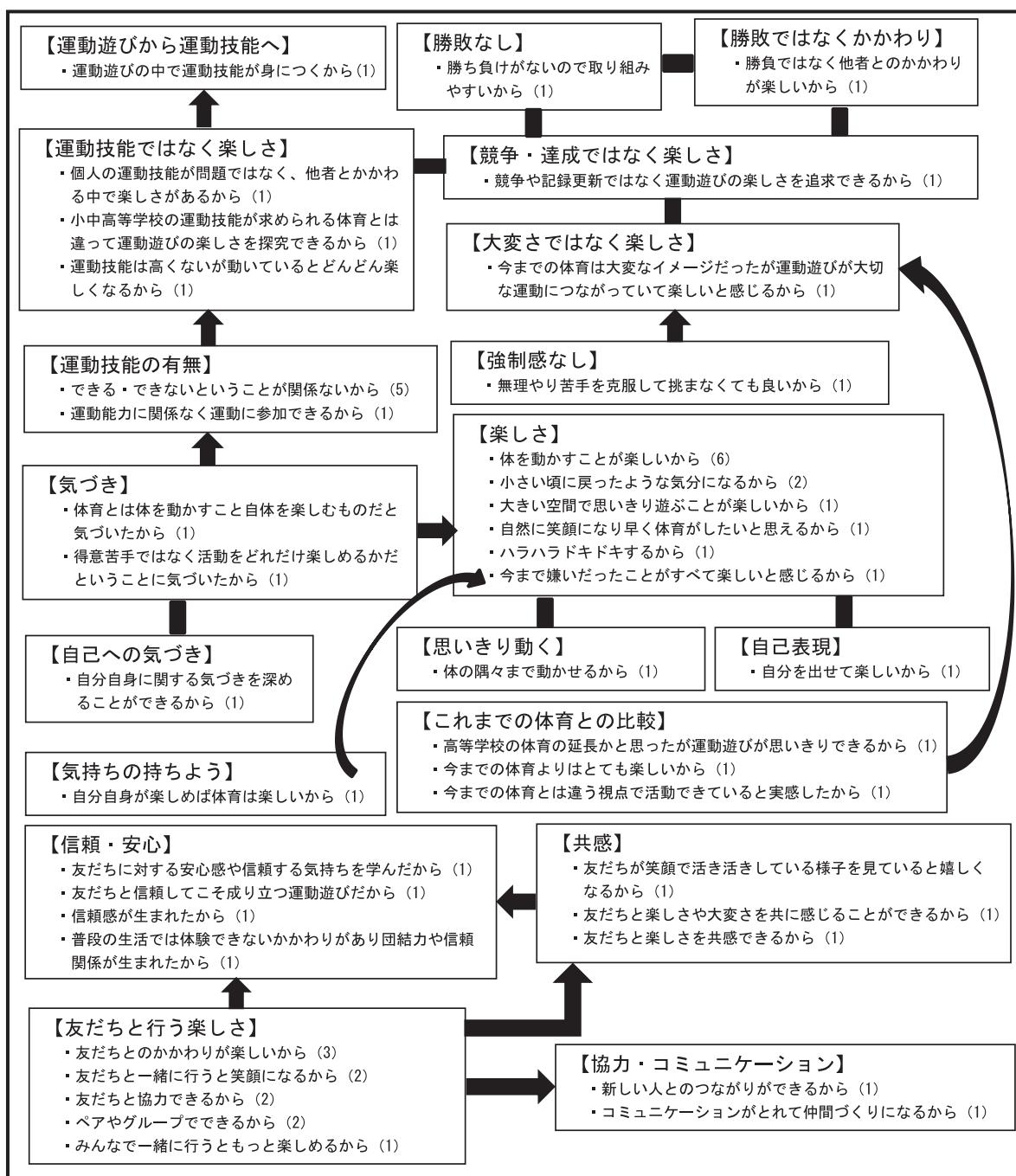
「部活経験」があつて「特定の運動種目が好き」つまり得意である、もしくは「運動能力の低さ」と関連して「特定の運動種目が苦手」つまり不得意であるといったカテゴリーには、計34項目がある。また、「体力に自信あり」、もしくは「体力に自信なし」といったカテゴリーには計3項目、勝つ喜びや挑戦意欲等「達成感」のカテゴリーには計3項目がある。これらのカテゴリー内項目を合計すると40項目となり、全体の約35%を占める。これらはすべて、運動ができる・できないといった基準で判断したり、学生にとって体育(運動)は克服・達成する対象であつたりすると考えられ、「原則志向(超越志向)による意味」がある。純粹に、体を動かすことが好きや友だちと運動する楽しさを感じている学生も多いが、「協力・仲が深まる」のカテゴリーでは、体育(運動)を通してコミュニケーションや人間関係を築くことができるといった、体育(運動)の手段化が見られ、「気分転換」「体力向上・健康」のカテゴリーと共に、「有用志向による意味」がある。「有用志向による意味」が見られる項目は、合計すると21項目にわたり、全体の約18%であった。「体を動かすことが好き」や反対に「嫌い」、「遊びが好き」「動くことが嫌い」「暑さ」「友だちと行う楽しさ」「友だちと考える」「楽しい」というカテゴリーからは、「共感志向による意味」が見られ、合計48項目となり、全体の約42%であった。

学生の第1回調査からは、被教育体験に基づいた体育(運動)に対する意識として、体育(運動)との関係を好ましいもの、もしくは好ましくないものと捉えているにしろ、学生にとって体育(運動)とは、運動そのものに夢中になつたり夢中になれなかつたり、一緒に運動を行つてゐる友だちと運動のおもしろさを共有できるものとして位置づいたりする等、「共感志向による意味」から捉えている学生が

最も多く見られた。次に、体力や特定の運動種目に自信がある、もしくは自信がないと捉えている等、体育（運動）とは、目標の克服や記録の達成を行うものであったり、自己や他者の記録と競争するものとして位置づいたりする「原則志向（超越志向）による意味」で捉えている学生が多いことが明らかとなつた。

3) 第2回調査の結果

第2回調査では、体育（運動）が「とても好き」は34名、「どちらかというと好き」は16名、「どちらかというと嫌い」は0名、「嫌い」は0名となつた。その理由を、第1回調査と比較するために、KJ法で分析を行つた。



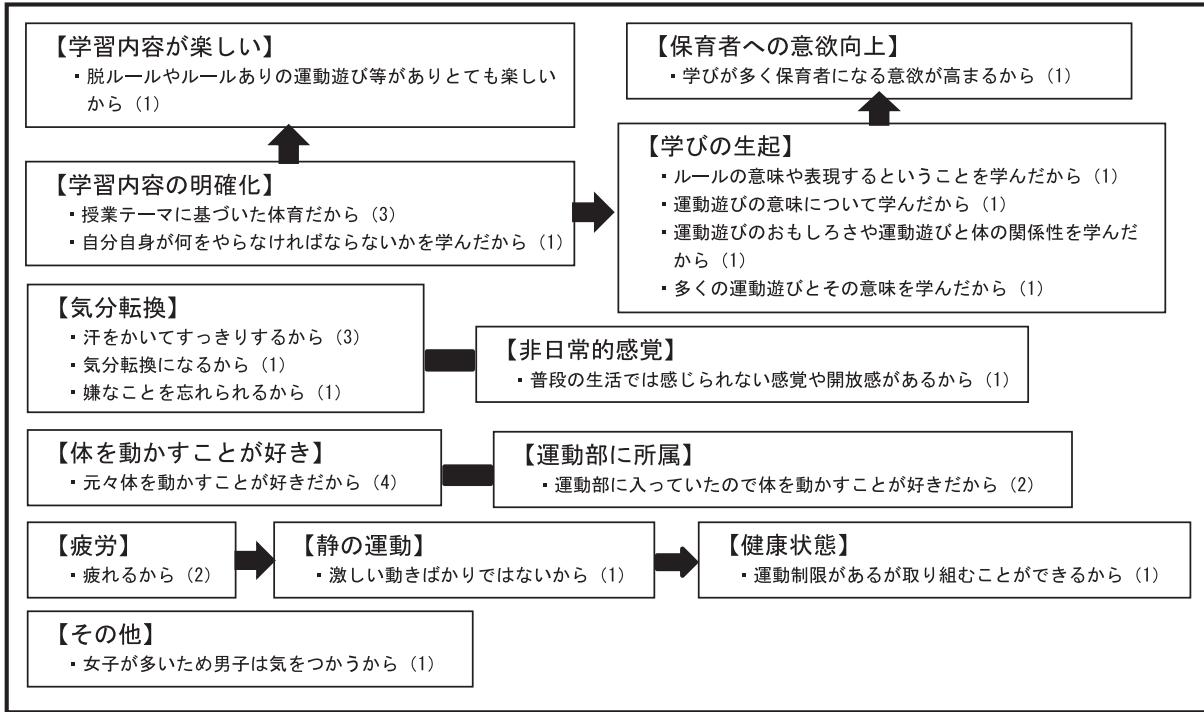


図 2 第2回体育（運動）に対する意識調査

KJ 法により、50 回答から 82 項目が抽出され、31 カテゴリーに分けられた。

上位カテゴリーから見ると、第 1 に、「楽しさ」(12 項目) が挙げられた。体を動かすことが楽しいや、小さい頃に戻ったような気分になる等の記述が見られた。第 2 に、「友だちと行う楽しさ」(10 項目) が挙げられた。友だちとのかかわりが楽しいや、ペアやグループで行うことが楽しい等の記述が見られた。第 3 に、「運動技能の有無」(6 項目) が挙げられた。運動能力やできる・できないに関係なく運動に参加できるという記述が見られた。第 4 に、「気分転換」(5 項目) が挙げられた。汗をかいてすっきりするや、嫌なことを忘れられる等の記述が見られた。

下位カテゴリーでは、「信頼・安心」(4 項目)、「学習内容の明確化」(4 項目)、「学びの生起」(4 項目)、「体を動かすことが好き」(4 項目)、「運動技能ではなく楽しさ」(3 項目)、「これまでの体育との比較」(3 項目)、「共感」(3 項目)、「気づき」(2 項目)、「協力・コミュニケーション」(2 項目)、「運動部に所属」(2 項目)、「疲労」(2 項目)、「運動遊びから運動技能へ」(1 項目)、「勝敗なし」(1 項目)、「勝負ではなくかかわり」(1 項目)、「競争・達成ではなく楽しさ」(1 項目)、「大変さではなく楽しさ」(1 項目)、「強制感なし」(1 項目)、「自己への気づき」(1 項目)、「思いきり動く」(1 項目)、「自己表現」(1 項目)、「気持ちの持ちよう」(1 項目)、「学習内容が楽しい」(1 項目)、「保育者への意欲向上」(1 項目)、「非日常的感覚」(1 項目)、「静の運動」(1 項目)、「健康状態」(1 項目)、「その他」(1 項目) が挙げられた。

4) 第2回調査結果の考察

できることだけに価値を置かない「運動技能の有無」「運動技能ではなく楽しさ」「気づき」のカテゴリーや、何かを克服・達成しなければならない「大変さではなく楽しさ」やそのための「強制感なし」

のカテゴリー、勝敗にこだわらない「勝敗なし」や「勝敗ではなくかかわり」、「勝敗ではなく楽しさ」が大切であるというカテゴリーからも分かるように、体育（運動）が学生にとって、目標達成や勝敗という結果の重視、運動技能の習得といった「原則志向（超越志向）による意味」を重視するのではなく、「原則志向（超越志向）による意味」を重視する前にもっと大切にしたいことがあるということに気づいたという結果が伺える。「これまでの体育との比較」のカテゴリーからも分かるように、多数の学生の体育（運動）に対する意識を構成していた「原則志向（超越志向）による意味」から、まずは体育（運動）のおもしろさに触れることが大切であるという体育（運動）自体への「共感志向による意味」が浮かび上がった。それは、項目として最も多い「楽しさ」のカテゴリーからも伺える。関連する項目を合わせると、合計31項目となり、全体の約38%であった。

体育（運動）のおもしろさに触れることから運動技能が結果として身につくといった「運動遊びから運動技能へ」のカテゴリーや、夢中になって活動する中で自己を出せるといった「自己表現」のカテゴリー、または自分自身に気づけるといった「自己への気づき」のカテゴリーも見られた。これらは、学生が体育（運動）の中で「共感志向による意味」を感じ、その後新しい自分自身に出会うことができた等の「有用志向による意味」や、今まで自分が身につけていた運動技能よりも高まった力を習得したという「原則志向（超越志向）による意味」が浮かび上がったということを示している。学生が「共感志向による意味」を感じることによって、「有用志向による意味」や「原則志向（超越志向）による意味」も生み出すことが可能であることが示された。

「楽しさ」のカテゴリーに続いて多かった「友だちと行う楽しさ」のカテゴリーでは、学生は友だちとペアやグループでかかわりながら運動遊びを行うことによる楽しさを感じている。その楽しさが、「共感」や「信頼・安心」のカテゴリーからも分かるように、他者（友だち）と一体になる感覚や楽しさの共有となり、他者に対して信頼や安心といった感情を持つことが示された。その結果として、「協力・コミュニケーション」のカテゴリーからも分かるように、体育（運動）とは、他者とのつながりを築き、コミュニケーションが図れるものであるという「有用志向による意味」も浮かび上がった。

「学習内容の明確化」のカテゴリーからは、授業で授業担当者は何を学ばせるのか、学生は何を学ぶのかを明確にすることにより、学生の学びが大きくなることが示された。学習内容の明確化が「共感志向による意味」を生み出し、学生に体育（運動）のおもしろさを味わわすことにつながることが「学習内容が楽しい」のカテゴリーから分かった。さらに、「学びの生起」「保育者への意欲向上」のカテゴリーからは、学習内容の明確化が学生の学びを生起させ、保育者になる意欲を向上させることができた。

5. おわりに

本研究は、保育者養成課程の学生の体育（運動）に対する意識調査を行い、他者とかかわりのある運動遊びを設定した「幼児体育Ⅰ」の授業を通して、学生の体育（運動）に対する意識の変容を捉え、保育者として必要な体育観構築に向けた授業づくりの視座を得ることを目的としてきた。

その結果、学生の既存の体育（運動）に対する意識は楽しさ等の「共感志向による意味」が多く、次いで克服・達成や競争等の「原則志向（超越志向）による意味」が多かった。しかし、授業が進むにつ

れて、「原則志向（超越志向）による意味」から「共感志向による意味」へのシフトが見られ、体育（運動）のおもしろさに触れることを重視する考えが生まれた。さらに、その結果として運動技能が身についたり、自己への気づきがもたらされたり、自己表現ができたり、他者とのつながりが生まれたりといった「有用志向による意味」や「原則（超越志向）による意味」が生まれてきた。また、その根幹を成すものとして、学習内容の明確化が挙げられた。学生と体育（運動）との関係性を考える中で、体育（運動）のおもしろさに触れさせ、他者と協同的に取り組んで、「共感志向による意味」を生起させる授業デザインの必要性が示された。

保育者養成課程に在籍する学生が、体育（運動）のおもしろさを実感し、他者と共にそのおもしろさを探求して学びを生み出すという体験は、学生が保育者となった時、子どもが運動技能を習得したり、数値で測定可能な結果としての体力・運動能力だけを重視したりして、子ども個人を変えようとする個体主義的な視点を持つのではなく、他者との関係の中で子どもが運動遊びのおもしろさを味わいながら、他者に対応していく「体力・運動能力」を育む関係主義的な体育での視点を持つことにつながると思われる。社会の中でこれからを他者と共に生きていく子どもを育てる保育者にとって、その意義は大きい。

今後の課題としては、次の点が挙げられる。本研究は、調査対象者を1クラスのみとしたため、「幼児体育Ⅰ」の授業受講者の3分の1にとどまった。そのため、本研究の結果がどのクラスにも当てはまるのかという検討が必要である。また、体育（運動）に対する意識の変容を、「好き・どちらか」というと好き・どちらか」というと嫌い・嫌い」の4つの選択肢ごとに回答者の変容を追う等、別視点からも考察していく必要がある。さらに、本研究結果を踏まえて、授業を再デザインし、保育者に必要な体育観の構築に向けていくことが必要であると考える。

【註】

1. 文部科学省（2013）『幼児期運動指針ガイドブック』株式会社サンライフ企画
2. 岡野昇（2000）『『共感志向による意味』を重視した学習の在り方』『カリキュラム研究第9号』日本カリキュラム学会 pp. 121 - 133
3. 作田啓一（1993）『価値観と性格』『生成の社会学をめざして』有斐閣 pp. 123 - 178
4. 川喜田二郎（1967）『発想法』中公新書

付記

本研究は、平成26年9月19日に行われた第53回全国保育士養成協議会研究発表「保育者としての体育観を構築する『幼児体育』授業に関する研究」と同調査を用いており、研究発表を基に加筆・修正したものである。